

展 望

ジェンダー心理学の研究動向 ——メタ分析を中心として——

東 清 和
(早稲田大学)

A REVIEW OF STUDIES ON PSYCHOLOGY OF GENDER

This article is intended to provide an overview on the meta analysis of gender differences in U.S.A. The issue of gender differences in cognitive ability, social behavior and personality will be briefly reviewed. In addition, the studies on sex role, sex role attitude, sex differences of self concept and personality in the Japanese Journal of Psychology (1970-1996) were reviewed.

Key words : gender difference, meta analysis, cognitive ability, social behavior, personality, sex role.

本論文は、かつては性差が認められるとされた視空間能力、数学的能力、言語能力および攻撃性に関するメタ分析、および性差が認められないとされた原因帰属、被影響性、非言語的コミュニケーション、援助行動、自尊感情、不安、主張性などのメタ分析の概観を試みたものである。加えて、1970年代以降の日本における性差・性役割に関する学会誌論文での研究動向を紹介した。

1. Maccoby と Jacklin の性差心理学

Maccoby と Jacklin による The Psychology of Sex Differences が1974年に出版された。1600余のデータにもとづいて、能力だけでなく、パーソナリティや社会的行動、記憶などといった心理学的特徴における性差が報告されている。その方法 (narrative method) は分野によって研究をグループ化し、性差が有意であったか有意でなかったかを研究ごとに記し、それらの数と有意な性差の一貫性から主観的に結論を引き出すという方法である。Maccoby と Jacklin の業績の1つとしては、系統だった編集をした結果、性差に関する数々の社会的通念が実験的結果によって検証が可能になった点にある。特に、女子は男子よりも社交的である、女子は男子よりも暗示にかかりやすい、女子は自尊感情が低い、女子は暗記学習や簡単な課題が得意で、男子はハイレベルな認知処理が得意である、女子は達成動機に欠けている、等という社会的通念が根拠のないものであると結論づけられたのである。それとは対照的に、Maccoby らは性差が4領域においてかなりはっきり認められるとも述べている。すなわち、女子は男子よりも言語能力に優れ、男子は視空間能力に優れ、男子は数学的能力に優れ、男子はより攻撃的であるということである。したがって、従来のレビュー

よりもはるかに多くの証拠に基づいた Maccoby らの結論は能力の性差に対する通念を再肯定したことになった。すなわち、女性は言語能力に優れ、男性は数学や視空間能力に優れているというものである。Maccoby らの出した結論は心理学の分野において強いインパクトを持ち、その後の心理学的性差研究にもっとも多く引用されるようになった。

1980年代に、様々な研究から得られた証拠を合わせる計量法を用いた、メタ分析と呼ばれる新しい統計法が開発され、劇的なまでに性差研究は変わりつつある。性差研究の結果を要約するのにメタ分析が有益なことは1980年前後に理解された (eg., Cooper, 1979)。その後、メタ分析は性差をレビューするにはもっとも一般的な方法となるに至っている (eg., Eagly & Wood, 1991)。

2. 能力における性差研究のメタ分析

(1) 能力における性差

Hyde (1981) により能力における性差のメタ分析が最初に発表された。その研究において Hyde は Maccoby と Jacklin が集めた研究の d 値を再分析し、計算したが、その結果は平均で、言語能力における性差が $d = -.24$ 、空間能力が $d = .45$ 、数学的能力が $d = .43$ であった。これ

らの結果が意味するところは、能力における性差がそれまでのレビューや教科書に書いてある結果ほど顕著なものではないということである。言語能力の性差は小さく、空間能力の性差はせいぜい中程度のものである。Hyde (1981) によれば、同性内差の方が異性間差よりもずっと大きなものであった。

(2) 視空間能力

Linn と Petersen (1985) は homogeneity analysis を用いて、空間能力における性差に関するより洗練されたメタ分析を行った。1974年以降の研究を用いて、172個のd値を計算し、空間能力には3タイプがあり、各が異なるタイプのテストによって測定されたものであり、各が異なる性差パターンを示していると結論づけた。Linn らが空間知覚と命名するところの空間能力の第1のタイプは棒と枠を用いた課題や水平課題によって測定されるものである。こうしたテスト課題では $d = .44$ であり、男性がやや優位であることを示唆している。空間能力の第2の課題は彼女らがメンタル・ローテーションと呼ぶもので、頭の中で二次元映像の物体を三次元に変換することができるかを測定するものであり、複数ある図から合致するものを1つ選ばせるものである。この課題では $d = .73$ であった。空間能力の第3のタイプは、視空間能力である。このタイプはより複雑な形をより単純な形に映像的に取り出す能力をみるものである。ここでのd値は.13であった。したがって、spatial disembedding には本質的に性差が見られず、水平・垂直知覚には中程度の性差が見られ、メンタル・ローテーションに比較的大きな性差があるということである。すなわち、それまでの空間能力における性差に関する全体的諸説というのは大ざっぱすぎたということになる。

Linn と Petersen (1985) は空間能力にみる性差のマグニチュードにおける年齢の効果についても分析している。それは、空間能力の性差が思春期以前には現れないということは思春期に起こる生物学的変化によるものであるという、先の Maccoby と Jacklin (1974) による主張に触発されて行われた分析である。Linn らのメタ分析によれば、先の推測は誤りであることが示唆された。先の分析ではライフ・スパンを通じた性差が提示されていたのである。例えば、水平・垂直知覚の測定について13歳以下の子どもでは $d = .37$ であったが、13～18歳の青少年を対象とした場合でも $d = .37$ であった。空間能力の性差についてなされた生物学的説明(例えば、性に関連した遺伝的なものとしての説明)がすべて思春期における性差パターンの変化を裏付けるものではないが、空間能力のある側面における性差が生物学的あるいは社会化といったことに根ざしたものであるか否かに関する疑問が完全に否定され

たわけではない。

(3) 数学的能力

数学的能力の性差に関するメタ分析は1990年代になってから、すでに3レビューがある。その中からここでは、Hyde, Fennema と Lamon (1990) を引用しておきたい。

Hyde は次のように指摘している。これまでのレビューにおいては、一貫して数学の成績は女性よりも男性がより優位であるといわれてきた。Hyde らはそのことを確認するために100論文のメタ分析を行ってみたが、全般的にみると $d = -0.05$ であった。このことから数学的能力に関する性差はまったく認められないといえる。数学的能力を下位概念に分類してみた場合、計算力は $d = -0.14$ 、数学的概念の理解力は $d = -0.03$ 、複雑な問題解決は $d = 0.08$ であった。発達の視点から加齢に伴う傾向を検討したところ、小学生と中学生での計算力は女子の方がやや優位であったが、問題解決では性差は認められなかった。そして、高校生においてはやや性差が生じ、 $d = 0.29$ 、大学生においては $d = 0.32$ と男性優位であった。年代的に比較すると性差の大きさは減少する傾向がある。1973年以前の研究に関しては、 $d = 0.31$ であったが、1974年 (Maccoby と Jacklin の性差心理学発刊) 以降の研究では $d = 0.14$ であった。そこで Hyde らは数学的能力の性差は小さいと結論づけている。ただし、高校生では、問題解決において女子生徒の成績が比較的に低いので、この点には注意を要すると指摘している。

(4) 言語能力

Hyde と Linn (1988) が行った言語能力における性差に関するメタ分析では165本の関連研究データが用いられ、それらのデータから120個のd値が計算された。研究全体の平均は $d = -.11$ であった。この値はかなり小さいものであり、Hyde らは言語能力については性差がないとの結論を出した。言語テストをタイプ別にみた場合でも、本質的な性差を示す証拠は得られなかった。例えば、語彙テストでは $d = -.02$ であり、読解力で $d = -.03$ 、エッセイでは $d = -.09$ であった。

3. 社会的行動における性差のメタ分析

(1) 原因帰属

Frieze ら (1982) による原因帰属における性差のメタ分析がある。このメタ分析に先駆けて、この分野では、女性は自分の成功を外的要因に、失敗を内的要因に帰属させる傾向があるという統一見解がなされていた。こうした見解は女性の低い学問的・職業的達成を説明するものとして使用されてきた。しかしながら、メタ分析によって性差に有意差がないことが示されたのである。例えば、成功を能力に帰属させることについては $d = .13$ であり、

男性が女性に比べてやや強い傾向があることを示している。失敗を能力に帰属させることについては、 $d = .16$ であり、ここでもやはり男性が女性に比べてやや強い傾向にあることが示されているのである。したがって、一般に原因帰属における性差モデルの一般的モデル—女性欠損モデル—はこうしたメタ分析によって否定されたのであり、原因帰属のパターンに性差がないという結論が導き出されている。

(2) 被影響性

Eagly と Carli (1981) は被影響性における性差のメタ分析を行っている。Eagly らの研究に先駆けて社会心理学の分野では、女性が男性よりも影響を受けやすいというのが共通見解であった。すなわち、女性は自分の意見を変えるよう説得されやすく、暗示を受けやすく、同調しやすいといわれていた。関連研究のほとんどが実験室的実験によるものである。例えば、同調性に関する標準尺度にアッシュ型パラダイムがある。Eagly らは男女の回答にみられる性差の大きさが小さいことを発見した。被影響性に関する研究では、 d 値の平均は $-.16$ であり、同調するよう集団圧力がかけられる場合の研究（アッシュ型パラダイムなど）では d 値の平均は $-.32$ であり、圧力がかけられない他の同調性に関する研究では d 値の平均は $-.28$ であった。同調するよう圧力をかける集団を使った研究で性差がもっとも大きかった群においても、女性がより受動的であるといった証拠になるほどのものではなかった。

Eagly らは研究者の性別と研究結果の関係についてもメタ分析を行った。男性研究者は女性研究者よりも、より大きな性差や女性にみられるより大きな従順さや同調性を見いだしているのである。女性によって行われた研究の場合、性差は見いだされていない。こうした効果を説明できるものは多くある。例えば、男性研究者は研究に立ち会うことで女性被験者の同調性を助長させるのかもしれない。男性研究者は実験場面や刺激材料を男性がよりよい反応をするようデザインしたかもしれないし、あるいは男性的内容を多く含むものを取り入れていたかもしれないのである。

(3) 非言語的コミュニケーション

Hall (1984) は顔の表情の判定における正確さにみられる性差研究、注視にみられる性差、対人距離・接触・体の動き・声にみられる性差などに関する多大な性差研究のメタ分析を報告している。Hall の研究結果では、他者の非言語表現を理解することにおいて女性は男性よりも優れており ($d = -.42$)、顔の認知 ($d = -.34$) や非言語コミュニケーションを用いた感情表現 ($d = -.50$) においても女性は男性よりも優れていた。女性はより表情が豊かであ

り ($d = -.90$)、他者から接近されやすく ($d = -.86$)、会話における誤りが少なかった ($d = -.66$)。これらの性差はすでに記した空間能力や言語能力にみられる性差よりもはるかに大きいものである。

(4) 援助行動

Eagly と Crowley (1986) は援助行動にみられる性差研究 (99論文) のメタ分析を行った。Eagly らはジェンダーと援助行動に関する社会的役割理論を打ち出し、男性性役割は英雄的で勇ましい援助を助成し、女性性役割は養育的でお世話的援助を助成するとの仮説を導き出している。彼女らは社会心理学者がこれまで行ってきた研究は見知らぬ人との短い出会いといった文脈における援助行動が主だったと述べている。その結果、女性役割によって規定される援助行動の研究がなされていない。なぜならそれらは長期間で親密な人間関係の中でみられることが多いからである。Eagly らの理論通り、女性よりも明らかに男性が援助行動を見せる場面というのは、テスト状況に危険が感じられた場合であり、男性が援助できるだけの力をもっとも強く感じた場合などである。例えば、道ばたでパンクしたタイヤのために立ち往生している人を助けるために車を止めたといったような状況での援助を調べれば、ほとんどの研究において男性の方が進んで援助するという結果を得ている。それは援助する側に危険が伴うからであり、車関係の問題には男性の方が能力があると感じているからである。反対に、問題を抱えた子どもを援助するためにボランティアするなどという場合、援助する側に危険の心配がほとんどないこと、女性の方が養育に関して能力を感じていることなどの理由により、女性がより積極的に援助を行っていることがほとんどの研究結果でいわれている。いずれにしろ、援助行動の性差研究の結果はきわめて不一致であった。

(5) 攻撃性・攻撃行動

Hyde (1984) は様々な観点から攻撃性における性差研究のメタ分析を行った。Hyde がメタ分析をする際に注目したのは、攻撃性における性差の年齢による傾向をみる発達の側面である。攻撃性を調べた被験者の年齢と様々な異なる方法を平均すると、性差の大きさは $d = .50$ であり、男性は実際により攻撃的であるが、性差は大きいものではなくふつう程度であることを意味している。被験者の年齢と性差の大きさには負の相関があり、子どもを対象にした研究で性差がより大きくなり、成人でもっとも小さくなる。特に6歳以下を対象にした研究の場合、 $d = .58$ であり、大学生では $d = .27$ になる。しかしながら、年齢群が違えば攻撃性の測定方法も異なることは珍しくなく、こうした結果の差は注意してみる必要がある。小学生を対象とした研究では身体的攻撃性（た

く、蹴るなど)を直接観察する方法がとられることが多く、大学生を対象とした研究では他者にショックを与える積極性などを測定する方法がとられることが多い。

こうした研究によって示された攻撃性における性差の大きさというのが時代の経過で減少しているというのは興味深いことである。1966年から1973年に発表された研究では、 $d = .53$ であり、1978年から1981年の間に発表された研究では $d = .41$ なのである。似たような傾向は認知能力のメタ分析でも発見されている。例えば、言語能力の性差に関する Hyde のメタ分析では、1973年より以前の研究では $d = -.23$ であるのに対し、1973年以降に発表された研究では $d = -.10$ であった。こうした性差の減少傾向は、心理学者が性差が有意でなかった場合の結果を発表する傾向が高くなってきていることの表われであるかもしれない。Eagly (1987) が性差の大きさにおける時代の傾向をみた研究をレビューしたところ、メタ分析によって結果が一致しないことがわかった。どちらかと言えば、性差が減少するという傾向が本当らしい。もしそうであるならば、こうした傾向は過去20年における性役割の変化が行動における性差の現象にどの程度結びついたかを示す顕著な証拠になるであろう。

Eagly と Steffen (1986) は攻撃的行動にみる性差に関する別のメタ分析を行っている。Eagly らは社会心理学者による研究に焦点を絞り、それらの研究のほとんどが大学生を被験者にしていることを指摘している。総体的に、男性は女性よりも攻撃的であった($d = .29$)。しかしながら結果のパターンは攻撃的行動の検証方法によってかなり異なっている。身体的攻撃性を伴う場合($d = .40$)の方が心理的攻撃性の場合($d = .18$)よりも性差が大きくなる。男性よりも、女性の方がその行動によって犠牲者が傷つく、罪悪感や不安を与える、危害が加えられると思った場合、性差が大きくなっている。

4. パーソナリティにおける性差

Feingold (1994) は Maccoby と Jacklin (1974) と Hall (1984) の2つのパーソナリティの性差についての過去のレビューについてメタ分析を行った。ここでは Maccoby と Jacklin によって行われた自尊感情、内的一外的統制型、不安、主張性の性差についての質的レビューに用いられた研究に関して、Feingold が行ったメタ分析の結果を引用しておきたい。

(1) 自尊感情

自尊感情における全般的性差はメタ分析で見いだされなかった($d = -.05$)。また被験者の年齢は統計的に効果量の変動と関連していた。女兒は男児よりも高い自尊感情を持っていた($d = -.11$)が、青年男子・成人男性は青年

女子・成人女性よりも高い自尊感情をもっていた($d = .10$)。しかしこれらの効果量の絶対値は両方とも大変小さいため、どちらの年齢集団でも自尊感情に本質的な性差はないといえる。

(2) 内的一外的統制型

内的一外的統制型における全般的性差はメタ分析で見いだされなかった($d = .01$)。しかし効果量の等質性は $p < .001$ で棄却された。この不均質性は操作方法によって説明され、行動測度を用いると男性は女性よりも内的に統制することが見いだされた($d = .25$)。これに対してパーソナリティ尺度で測定された場合、性差は見いだされなかった($d = -.05$)。行動測度カテゴリーにおける効果量は等質であり、パーソナリティ尺度カテゴリーの効果量の不均質性は有意であった。後者のカテゴリーに入る多くの研究は、Intellectual Achievement Responsibility scale (IAR; Crandall, Katkovsky, & Crandall, 1965) で内的統制の所在を測定していた。女性は男性よりも IAR でより内的統制的とみなされる得点をとっていた($d = -.28$)。これに対して、他の統制型の尺度を用いた研究では、男性の方が女性よりも内的統制とみなされる得点を得ていた($d = .34$)。被験者の年齢による効果量の有意な変動はなかった。

(3) 不安

不安測度では、男性よりも女性の方がやや高いことがメタ分析で明らかになった($d = -.29$)。効果量の等質性は棄却され、このことは全研究を通じての効果量の変動はサンプリングエラーによるものであることを示している。効果量は子どもで($d = -.24$)、青年・成人で($d = -.31$)と同様であった。

(4) 主張性

操作方法と年齢の両方で効果量が有意に変化することが示された。主張性の行動測度では性差は見いだされなかったが($d = .04$)、パーソナリティ尺度では男性が女性よりも主張的であった($d = .23$)。また子どもでは主張性に性差は見られなかったが($d = .03$)、青年男子・成人男性は青年女子・成人女性よりも主張的であった($d = .20$)。しかし、子どもの研究はすべて行動測度で測られているのに対し青年と成人の研究の多くはパーソナリティ尺度で測られているため、操作方法と年齢がかなり交絡する。このため結論としては、(a)子どもの主張的行動に性差はない、(b)青年男子と成人男性は青年女子・成人女性よりもパーソナリティ尺度の得点において主張性が高いということになる。

5. 国内におけるジェンダー心理学の研究動向

この種のレビュー論文は頁数の関係上選別的にならざ

るをえない。どの国内論文を含めるかの基準としては、前述のアメリカにおけるメタ分析の結果と対応させるために1970年以降に発表され、性差・性役割関連の論文を掲載している主要な学会誌論文に限定した。ただし、それ以前から行われていた継続研究は含めた。学会誌としては教育心理学研究、心理学研究、心理学評論、実験社会心理学研究、社会心理学研究、産業・組織心理学研究の6誌を選択した。

それらを概観すると、大別して、次の4つのカテゴリーに分類することができる。第1類は主として性役割を研究対象としたもので、性役割認知の発達、性役割意識の発達、性別選好、就労女性の性役割、そして性役割概念(理論的側面)等に関する研究で、15論文が該当する。第2類は性役割態度とその測定尺度に関する研究で8論文をあげることができる。第3類は男性性・女性性という記述的・包括的な概念を扱った研究で、心理的両性具有、性役割同一性、性別アイデンティティ、ジェンダー・スキーマなどのジェンダー・カテゴリーが含まれる。それらに該当する論文は18論文で比較的多い。第4類は被験者変数として生物学的性別を用いた性差(sex differences)研究で、認知的側面、パーソナリティ的側面、自己概念的側面、社会的行動の側面などを扱っており、それらが10論文であった。

(1) 性役割

性役割認知に関しては柏木(1967, 1972, 1974)の一連の研究がまずあげられる。それは青年期の性役割学習を認知的側面から検討することを目的として行われた。因子分析による性役割次元が検討され、第I因子を知性因子、第II因子を従順と美の複合因子、第III因子を行動力の因子と名づけた。これらの研究はその後の性役割認知の研究にもっとも頻繁に引用されている。同系統の研究としては小・中学生を対象とした東・田中・土屋(1973)をあげることができる。そして、性役割の発達に関する内外の研究論文のレビューが発表されるに至った(井上, 1975)。このレビューでは性役割発達、性役割ステレオタイプ、性役割同一性が主題とされた。柏木(1972)らの性役割認知の研究の系譜として、思春期の身体発育と性役割意識の形成過程の研究も行われ、身体的満足度と性役割意識との関係が検討された(斎藤, 1985)。

幼児を対象として、玩具を用いた性役割行動を選択する際のラベリングの効果について、実験的な研究が行われた(増田・中尾, 1981)。この種の性役割行動の獲得過程に関する実験的研究の発表件数は現在もなお意外に少ない。親が持つ子供の性別に対する関心を性別選好(sex preference)というが、日本人の性別選好に関しては坂井(1989, 1992)の研究があげられる。日本においてはかつて

は男児選好をする率が高かったが、それが女児選好へ移行する徴候が認められる。また、就労女性の増加傾向を反映して就労女性を対象とした女性のキャリア研究が1990年代になってから発表されるようになった。金井(1994)は働く就労女性のキャリア・ストレス・モデルを提唱し、転職・退職行動の規定要因をパス解析によって解明しようとしている。若年就労女性の仕事と家庭との両立葛藤は解決を迫られている課題といえよう。同じ領域の研究として、女性管理職(小学校教頭)の登用状況に及ぼす性役割の影響を調査した研究(坂田, 1994)がある。女性のキャリア形成過程という課題も重視されてよいと思う。

ステレオタイプの認知とカテゴリー化情報の関係についての実験的研究が最近発表されている。話し手の性別と、発言内容の性度とが操作され、カテゴリー化が引き起こす刺激手掛かりが、対人記憶と印象評定にどのような効果を及ぼすのかを実験し、話し手の性別によって引き起こされる強調化(accentuation)効果の普遍性について検討されている(潮村, 1995)。この種の基礎的な実験研究の増加が望まれる。性役割に関する概念的、理論的研究は3編発表されている。飯野(1984)は「性役割」という概念の多面性と題して、性役割の側面、性役割としてとらえるべき特性(レベル)、性役割の次元の3点から内外の論文を展望した。研究者によってそれらがいかに異なっているか、その多様性が指摘されている。

ジェンダーに関する理論的研究では、土肥(1994a)がBem(1981)のジェンダー・スキーマとセルフ・スキーマ(Markus, Crane, Bernstein, & Siladi, 1982)の2種のスキーマモデルの比較検討を行った。大学生を対象とした質問紙調査であるが、2種のスキーマモデルのパスダイアグラムが呈示され、自己概念に関する情報処理の研究に1つの方向性を示している。同じような理論的研究であるが、伊東(1995)はセックスとジェンダーという2種の概念、定義、用語使用などを時系列的に展望し、それらが混乱している状況を指摘し、その整理を試みている。その上で新たな提案がなされており、参考になることが多い。

(2) 性役割態度

伊藤(1980)は女子学生を対象として性役割観と父母の養育態度との関連を調査した。父母の養育態度の因子構造を明らかにして、女子学生が卒業後に希望する職歴との関連性を分析した。さらに伊藤・秋津(1983)は中学生・高校生・大学生・成人を対象に性役割観と性役割期待の認知との関連性についても報告している。

性役割態度研究の展望は東・鈴木(1991)によって行われている。性役割態度を測定する尺度に関しては、性役

割志向性尺度 (ISRO) の性差研究 (東, 1990), フェミニズム・スケールの信頼性・妥当性 (鈴木, 1991), 平等主義的性役割態度 (SESRA) の信頼性・妥当性 (鈴木, 1991), その短縮版 (SESRA-S) の作成 (鈴木, 1994), そして SESRA-S を用いての若年女性の就労との関連性の研究 (鈴木, 1996) がある。性役割態度尺度に関しては現在のところ上記の2種類のみが報告されているにすぎない。

(3) 男性性・女性性とジェンダー・カテゴリー

日本では男性性・女性性の次元に関する二次元的モデルはかなり早く提言されていた (多田, 1973)。そして、二面性を測定するための質問紙を作成し、因子分析をおこない、総合的に「人格の二面性」を測定することが検討された (森, 1983)。この系統の研究で、望ましくない意味をもつ語 (negative 語) を加えた質問紙を作成し、人格の二面性を測定する試みもなされている (桑原, 1986)。さらに、中学・高校・大学生を対象にして、男性性・女性性の2側面の検討が行われ、発達的変容についても報告された (山口, 1985, 1989)。

男性性・女性性に Humanity という次元を加え、三次元の M-H-F 尺度も考案された (伊藤, 1978)。この M-H-F 尺度と女子学生の大学卒業後の職経歴や性の受容、性度との関連性についても報告されている (伊藤, 1981)。さらに伊藤 (1986) は性役割意味次元の解明を試み、単極尺度と双極尺度との比較検討をし、性役割測定尺度 (ISRS) の作成を試みている。

男性性・女性性に関する実験的研究は日本ではきわめて少ない。その中で、八木 (1992) は女子学生を対象として、女性性 (あるいは男性性) を発揮している随筆文、批評文を用い、女性の自尊心の基盤を実験的に同定することを試みている。

ジェンダー・カテゴリーを論ずる場合、心理的両性具有性 (androgyny) は1970年代後半から1980年代においてはもっとも中心的な課題であった。Bem の BSRI と心理的両性具有性に関しては三井 (1989) が、そして、心理的両性具有性の形成モデルに関しては土肥 (1994b) が興味深い考察を行っている。実態調査研究としては Spence の PAQ を用いて両性具有型、男性型、女性型、未分化型と看護職の職位との関連性の研究 (東, 1990), BSRI を用いて就労女性のキャリア自己効力との関連性の研究 (松井, 1991) などがあげられる。アンドロジニー・スケールを用い、男性性・女性性と成人女性の妻、母、就業者役割という多重役割との関連性も研究されている (土肥, 1990)。さらに M-H-F スケールを用いて、女子短大生を対象に母性・父性・大人性への志向性との関連性についても研究され、両性具有性という概念の修正モデルが提言されている (土肥, 1995)。なお、土肥 (1996) は自己の性の受容、父母

との同一化、異性との親密性の3つの下位概念を仮定し、ジェンダー・アイデンティティ尺度を作成している。男性性・女性性を性別アイデンティティという概念でとらえ、20代から50代の男女を対象として、性別アイデンティティのデモグラフィック規定因の認知相関指標を指標にした調査研究も行われている (石田, 1993)。自己開示は性差研究の中では関心が高いテーマである。情動の自己開示・性差や男性性・女性性と情動の自己開示の研究 (和田, 1993), そして、同性愛に対する態度と性役割同一性との関連性の研究 (和田, 1996) も最近の研究としてあげておきたい。

(4) 性差

被験者変数として生物学的性別を用いた性差研究は意外に少ない。言語と空間情報の記憶に、性別と潜在的ラテラルティの要因がどのように影響を及ぼしているかが検討されている (永江, 1982)。このような男女の脳半球の機能分化と言語、空間情報の性差を関連づけた研究はその後、発表されていない。身体像に関しては、身体像と男らしさ・女らしさの認知との関連性の性差についての報告 (柴田・野辺地, 1991) がある。なお、知的能力における性差に関するレビューは比較的早期になされている (大沢, 1975)。

性格・パーソナリティ次元に関しては、場依存性の性差に関する展望 (滝上, 1975), 独自性欲求の性差研究 (岡本, 1988), 自己認知の諸側面 (外面的, 能力的, 内面的) の因子構造と自己概念の性差 (山本・松井・山成, 1982), 高齢者の自己概念の性差と加齢との関連性の研究 (下仲・村瀬, 1976), さらに高齢者の自己概念の性差, 世代差の比較研究 (下仲, 1980) などがある。

社会的行動の次元についてみると、職場のリーダーシップ機能の性差 (坂田・黒川, 1993) と説得的コミュニケーションに対する被影響性の性差 (上野, 1994) の2論文がある。そして、性差・性行動の異文化間研究 (清水, 1979) は性行動の性差を扱った数少ない論文である。

6. 今後の研究課題

メタ分析の結果から生物学的性別を被験者変数とした性差研究には限界があることが判明しつつある。しかし、現実には男女間かなりの差異が認められる心理現象は多い。特に、社会的行動に関してはその傾向がある。そのことを説明するために、説明変数として、生物学的性別以外の変数を検討してみる必要がある。Deaux (1984) が提言したような、人が他者と相互作用する際の力動的な過程全体を考慮したアプローチを試みても一案であろう。

教育心理学会という立場からみた場合、日本における

男女平等教育の基礎研究としてのジェンダー心理学的研究がなされてよい。現状ではほぼ皆無に等しい。学校における男女平等教育の推進が強調されている現状からみても緊急な課題であると思う。

引用文献を主要な学会誌に掲載された論文に限定したせいもあるが、日本での研究報告数そのものがあまりにも少ない。メタ分析を行えるだけの研究例もないのが現状である。そこで、日本のジェンダー心理学研究を促進するためにもジェンダー研究体制の整備、例えばお茶の水女子大学に開設(1996年)されたジェンダー研究所のような研究機構の充実と、若年研究者の養成を期待したい。

引用文献

- 東 清和 1990 看護職の職位と性役割パーソナリティとの関連 産業組織心理学研究, 4, 1, 3-16.
- 東 清和 1990 青年期における性役割志向性の性差 社会心理学研究, 6, 1, 23-32.
- 東 清和・鈴木淳子 1991 性役割態度研究の展望 心理学研究, 62, 4, 270-276.
- Bem, S.L. 1981 Gender schema theory: A cognitive account of sex typing. *Psychological Review*, 88, 354-364.
- Cooper, H.M. 1979 Statistically combining independent studies: A meta-analysis of sex differences in conformity research. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 131-146.
- Deaux, K. 1984 From individual differences to social categories: Analysis of a decade's research on gender. *American Psychologist*, 19, 105-116.
- 土肥伊都子 1990 多重な性役割従事に関する研究—役割従事タイプ, 達成感と男性性, 女性性の効果— 社会心理学研究, 5, 2, 137-145.
- 土肥伊都子 1994a ジェンダーに関する2種のスキーマモデルの比較検討 心理学研究, 65, 1, 61-66.
- 土肥伊都子 1994b 心理学的男女両性具有性の形成に関する一考察 心理学評論, 37, 2, 192-203.
- 土肥伊都子 1995 ジェンダーに関する役割評価・自己概念とジェンダー・スキーマ—母性・父性との因果分析を加えて— 社会心理学研究, 11, 2, 84-93.
- 土肥伊都子 1996 ジェンダー・アイデンティティ尺度の作成 教育心理学研究, 44, 2, 187-194.
- Eagly, A.H. 1987 Sex differences in social behavior: A social-role interpretation. Hillsdale, N.J. : Erlbaum.
- Eagly, A.H., & Carli, L.L. 1981 Sex of researchers and sex-typed communications as determinants of sex differences in influenceability: A meta-analysis of social influence studies. *Psychological Bulletin*, 90, 1-20.
- Eagly, A.H., & Crowley, M. 1986 Gender and helping behavior: A meta-analytic review of the social psychological literature. *Psychological Bulletin*, 100, 283-308.
- Eagly, A.H., & Steffen, V.J. 1986 Gender and aggressive behavior: A meta-analytic review of the literature. *Psychological Bulletin*, 100, 309-330.
- Eagly, A.H., & Wood, W. 1991 Explaining sex differences in social behavior: A meta-analytic perspective. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 17, 306-315.
- Feingold, A. 1994 Gender differences in personality: A meta analysis. *Psychological Bulletin*, 116, 429-456.
- Frieze, I.H., Whitley, B.E.Jr., Hanusa, B.H., & McHugh, M.C. 1982 Assessing the theoretical models for sex differences in causal attributions for success and failure. *Sex Roles*, 8, 333-343.
- Hall, J.A. 1984 Nonverbal sex differences: Communication accuracy and expressive style. Baltimore: Johns Hopkins University Press.
- 東 俊子・田中久子・土屋和子 1973 性役割認知の発達 教育心理学研究, 21, 1, 48-53.
- Hyde, J.S. 1981 How large are cognitive gender differences? : A meta-analysis using W^2 and d . *American Psychologist*, 36, 892-901.
- Hyde, J.S. 1984 How large are gender differences in aggression? : A developmental meta-analysis. *Developmental Psychology*, 20, 722-736.
- Hyde, J.S. 1990 Meta-analysis and the psychology of gender differences. *Signs: Journal of women in culture and society*, 16, 10-28.
- Hyde, J.S., Fennema, E., & Lamon, S.L. 1990 Gender differences in mathematics performance: A meta-analysis. *Psychological Bulletin*, 107, 139-155.
- Hyde, J.S., & Linn, M.C. 1988 Gender differences in verbal ability: A meta-analysis. *Psychological Bulletin*, 104, 53-69.
- 飯野晴美 1984 「性役割」という概念の多面性について 心理学評論, 27, 2, 158-17.
- 井上知子 1975 性役割の発達に関する最近の研究 心理学評論, 18, 11-13.
- 石田英子 1993 性別アイデンティティのデモグラ

- フィック規定因に関する基礎的研究 — 認知相関指標を用いた尺度による — 社会心理学研究, 8, 1, 56-63.
- 伊東秀章 1995 セックスかジェンダーか? — 概念, 定義, 用語をめぐる考察 — 心理学評論, 38, 3, 441-461.
- 伊藤裕子 1978 性役割の評価に関する研究 教育心理学研究, 26, 1, 1-10.
- 伊藤裕子 1980 女子青年の性役割観と父母の養育態度 — 大学生の職経歴選択を中心に — 教育心理学研究, 27, 1, 67-71.
- 伊藤裕子 1981 女子青年の性役割意識の構造 教育心理学研究, 29, 1, 84-87.
- 伊藤裕子・秋津慶子 1983 青年期における性役割観および性役割期待の認知 教育心理学研究, 31, 2, 146-150.
- 伊藤裕子 1986 性役割特性語の意味構造 — 性役割測定尺度 (ISRS) 作成の試み — 教育心理学研究, 34, 168-174.
- 金井篤子 1994 働く女性のキャリア・ストレス・モデル — パス解析による転職・退職行動の規定要因分析 — 心理学研究, 65, 2, 112-120.
- 柏木恵子 1967 青年期における性役割の認知 教育心理学研究, 15, 4, 193-202.
- 柏木恵子 1972 青年期における性役割の認知 II 教育心理学研究, 20, 1, 48-58.
- 柏木恵子 1974 青年期における性役割の認知 (III) — 女子学生青年を中心として — 教育心理学研究, 22, 4, 205-215.
- 桑原知子 1986 人格の二面性測定の試み — NEGA-TIVE 語を加えて — 教育心理学研究, 34, 31-38.
- Linn, M.C., & Petersen, A.C. 1985 Emergence and characterization of sex differences in spatial ability: A meta-analysis. *Child Development*, 56, 1479-1498.
- Maccoby, E.E., & Jacklin, C.N. 1974 The psychology of sex differences. Stanford, CA: Stanford University Press.
- Markus, H., Crane, M., Bernstein, S., & Siladi, M. 1982 Self-schemas and gender. *Journal of Personality and Social Psychology*, 42, 38-50.
- 増田公男・中尾 忍 1981 幼児の遊び行動に及ぼす性差, 性役割選択及び性的ラベリングの効果 教育心理学研究, 29, 1, 75-79.
- 松井賚夫 1991 女性の手段・表現性パーソナリティ特性とキャリア自己効力との関連性 — ホランドの職業分類学的アプローチ — 産業・組織心理学研究, 5, 1, 3-10.
- 三井宏隆 1989 心理的両性具有とは何か — Bem. S. L. の考え方とアプローチを中心に — 実験社会心理学研究, 28, 2, 163-169.
- 森 知子 1983 質問紙法による人格の二面性測定の試み 心理学研究, 54, 3, 182-188.
- 永江誠司 1982 言語と空間情報の再生における性差と潜在的ラテラリティの型 教育心理学研究, 30, 328-333.
- 岡本浩一 1988 独自性欲求の男女差に関する基礎的研究 社会心理学研究, 3, 2, 56-62.
- 大沢正子 1975 知的能力における性差 心理学評論, 18, 1, 25-38.
- 坂井博通 1989 現代日本人の性別選好について — 2子の性別パターンと3子出生の関係から — 社会心理学研究, 4, 2, 117-125.
- 坂井博通 1992 近年における子どもの性別選好の動向とその社会経済的差異 社会心理学研究, 7, 2, 75-84.
- 坂田桐子・黒川正流 1993 地方自治体における職場のリーダーシップ機能の性差の研究 — 「上司の性別と部下の性別の組み合わせ」からの分析 — 産業・組織心理学研究, 7, 1, 15-25.
- 坂田桐子 1994 小学校教頭のキャリア形成過程に及ぼす性別要因の影響 産業・組織心理学研究, 8, 1, 41-51.
- 斉藤誠一 1985 思春期の身体発育と性役割意識の形成について 教育心理学研究, 33, 336-344.
- 柴田利男・野辺地正之 1991 青年期の身体に対する男らしさ・女らしさの認知 教育心理学研究, 39, 40-46.
- 清水弘司 1979 性差・性行動の異文化間研究 心理学評論, 22, 3, 306-318.
- 下仲順子・村瀬孝雄 1976 加齢と性差よりみた老人の自己概念 教育心理学研究, 24, 3, 156-166.
- 下仲順子 1980 青年群との対比における老人の自己概念 — 世代差, 性差を中心として — 教育心理学研究, 28, 4, 303-309.
- 潮村公弘 1995 ステレオタイプの認知とカテゴリー化情報の関係について — 対人記憶, 印象評定に及ぼす刺激手がかりの効果 — 実験社会心理学研究, 35, 1, 1-13.
- 鈴木淳子 1987 フェミニズム・スケールの作成と信頼性・妥当性の検討 社会心理学研究, 2, 2, 45-54.
- 鈴木淳子 1991 平等主義的性役割態度: SESRA (英語

- 版)の信頼性と妥当性の検討および日米女性の比較
社会心理学研究, 6, 2, 80-87.
- 鈴木淳子 1994 平等主義的性役割態度スケール短縮版
(SESRA-S)の作成 心理学研究, 65, 1, 34-41.
- 鈴木淳子 1996 若年女性の平等主義的性役割態度と就
労との関係について—就労経験および理想の仕事
キャリア・昇進パターン— 社会心理学研究, 11, 3,
149-158.
- 多田建治 1973 パーソナリティに於ける男女性の次元
—二次元的試論— 心理学評論, 16, 3, 189-208.
- 滝上凱令 1975 場依存性の性差 心理学評論, 18, 1,
14-24.
- 上野徳美 1994 説得的コミュニケーションに対する被
影響性の性差に関する研究 実験社会心理学研究, 34,
2, 195-201.
- 和田 実 1993 同性友人関係:その性および性役割タ
イプによる差異 社会心理学研究, 8, 2, 67-75.
- 和田 実 1996 青年の同性愛に対する態度:性および
性役割同一性による差異 社会心理学研究, 12, 1,
9-19.
- 八木保樹 1992 男性性と女性性—女性の自尊心の基
礎に関する実験的研究— 実験社会心理学研究, 32,
2, 145-159.
- 山口素子 1985 男性性・女性性の2側面についての検
討 心理学研究, 56, 4, 215-221.
- 山口素子 1989 男性性・女性性の2側面についての検
討II—自己期待と他者期待— 心理学研究, 59, 6,
350-356.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 1982 認知された
自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.